

## 与論島における観光再生の現状

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-01-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 桑原, 季雄 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/12805">http://hdl.handle.net/10232/12805</a>

## 与論島における観光再生の現状

桑原季雄

鹿児島大学法文学部

### Revitalization of Tourism in Yoron Island

KUWAHARA SUEO

Faculty of Law, Economics and Humanities, Kagoshima University

#### 要旨

与論島では昭和54年をピークに観光客が減少していくなかで、様々なイベントを企画することによって、シーズンオフ期の冬場の観光客の開拓と誘致を積極的にはかかってきた。従来の若者中心のビーチ観光やマスツーリズムから、ブーム後は様々なイベントの企画によって幅広い年齢層、多様な観光客の誘致を目指し、受動的観光から積極的観光政策へ大きく方向転換した。本稿では与論島の観光の現状と再生に向けた様々な取り組みについて紹介し、与論島の観光の性格や変遷の特徴について考察する。

キーワード：観光ブーム、まちづくり、差別化、来住者、イベント

#### Abstract

Tourism in Yoron had its peak in 1979 and after that the number of tourists decreased markedly. After the boom, Yoron islanders have ever been trying to bring tourists back again by creating various kinds of events and attractions not only in summer but also in winter and all year round. Thus Yoron tourism has changed from a mere beach tourism and mass tourism to a tourism which attracts a wider range of tourists, or from passive tourism to proactive tourism. The paper discusses about the present situation of tourism and the various efforts toward the revitalization of tourism in Yoron Island.

**Keywords:** tourism boom, town development, difference, incomer, event

#### はじめに

日本列島の最南端、鹿児島県の南方海上に位置する奄美群島の最南端に与論島がある。鹿児島から560キロ、南の沖縄から21キロの距離にあり、人口5,731、世帯数2,087(2005年現在)<sup>1</sup>で、周囲23キロ、面積20平方キロ、東西5キロ、南北4キロ、標高97メートルの小さな島である。年平均気温は摂氏23度と温暖で、亜熱帯気候に属す。

歴史的には琉球王朝や薩摩藩に服属し、終戦後は7年間米軍信託統治となり、昭和28

1 与論町役場企画調整課編『平成21年町勢要覧』による。

年（1953）に他の奄美群島と一緒に日本本土へ復帰した。島民たちは、長期にわたり、幾多の植民地支配を経験してきた。また、台風や干ばつなどの災害との闘いの歴史もある。ひどい干ばつや人口の増加は水飢饉となって島民を苦しめ、さらに、耕地に恵まれない島は、人口の増加によってたびたび飢饉にも直面した。明治32年（1899）には、240名の島民が長崎県口之津へと集団移住し、2次、3次の移住も行われたほか、1944年の満州移民開拓団が戦後帰国直後の1946年に鹿児島県肝属郡田代町へ再移住している。

与論島は1970年代後半から80年代にかけて観光ブームに沸き、昭和54年（1979）にそのピークを経験したが、その前後で観光の性格が大きく変わってきた。ブーム期までは「日本最南端」と「百合ヶ浜」だけで多くの観光客、特に若者を惹きつけたが、ブームの後には、沖縄の観光インフラの整備が進むのと平行して観光客が減少し、島民の間に危機意識が芽生えてきた。1980年代後半から現在までの与論島の観光への取組みはまさに、この危機意識とともにあり、それをばねにして多くの新しい取組みがなされてきたといえる。

与論島に関する研究は、これまで郷土史〔横尾1963、小園1988〕や民俗文化〔水流1960、栄1964、1971、加藤1977、大内1982、赤田1993、山田1984、菊1985、近藤2001、2003、2004、金城2007、津波2007、津波・稲村2005〕に関するものなどがあり、とりわけ1960年代から70年代にかけては社会学者や人類学者による家族や親族に関する研究〔大山1960a、1960b、1960c、牛島1972、1973、1983、加藤1981〕が盛んに行われたが、与論島の観光化に関する研究は必ずしも多くない。そのなかで、農業等の産業構造の変動を観光化との関連で考察した研究〔戸谷1981〕や、近年の与論島の観光化と地域振興に関する調査報告〔鹿児島地域経済研究所2003、桑原2005、田島2005、長嶋2005〕、観光ブームの功罪についてのルポ〔藤沢1971、西野2006〕が見られるだけで、本格的な研究には程遠いと言える。

以上のような先行研究を踏まえて、本研究では、与論島の観光化の歴史を概観し、その特徴を明らかにするとともに、現在の観光化の取り組みの現状を分析し、今後の本格的な研究の足掛かりとしたい。

## 観光ブームの周辺

昭和50年代の観光ブームで知られる与論島の観光化の足跡は、奄美の他の諸地域には全く見られない、まさに特殊ヨロンの現象であった。与論島では、観光ブームにわく直前の昭和44年（1969）に、観光客は14,535人に過ぎなかったが、その後昭和48年に69,986人と急増し、昭和51年には10万人を超え、昭和53年（1978）には初めて15万人を突破し、昭和54年（1979）には150,387人とそのピークに達した。しかし、その後は減少に転じ、昭和61年（1986）には10万人を割り、平成3年（1991）までは9万人台で推移していたが、平成7年（1995）以降は平成15年（2003）まで7万人台で推移し、ブーム初期の昭和50年（1975）の水準にまで減少した。その後、平成20年現在まで6万人台を維持してきており、概ね横ばい状態にある<sup>2</sup>。

観光客の動向の特徴についてみれば、ブーム期はその多くが夏季に極端に集中し、昭和51年における7～8月の2ヶ月間の観光客数は、1年間の観光客総数の50%を占めた。さらに、観光客の90%以上が夏休みを利用した学生と若い会社員などで占められたが、ブーム後は、後述するように、夏場のみならず、冬場もヨロンマラソンなど様々なイベントによって多様な年代層の観光客を取り込むようになった。

ブーム前の宿泊施設は、小さい宿屋が4、5軒にすぎなかったが、ブーム初期の昭和46年（1971）と昭和47年（1972）の2年間で、一挙に41の宿泊施設が新設され、ピーク

期の昭和54年（1979）には、宿泊施設が99カ所（ホテル18、民宿81）と激増した<sup>3</sup>。民宿が全宿泊施設の80%、収容人数の70%を占め、圧倒的に農家の兼業から発展した民宿に依存していたのがその大きな特徴であった。また、ブーム期の宿泊施設の分布状況を見ると、高級ホテルはすべて茶花市街地ならびに百合ヶ浜海水浴場に近い海岸付近に建てられていたが、民宿はそのほとんどが農家の兼業ないし転業によるものであるため、各地区に広く分散した。民宿81施設のうち、茶花地区に32、東区に29、立長に10、那間地区に3、古里地区に4、朝戸地区に2、西区に1という分布を示している<sup>4</sup>。

ブーム後は、宿泊施設の数も激減し、平成15年には、ホテルが8軒、民宿・旅館が24軒で<sup>5</sup>、最盛期の3分の1にまで減少し、茶花地区以外の宿泊施設は大きな打撃を受け、そのほとんどは廃業に追いやられた。特に東地区には現在でもかつてのホテルや民宿の廃墟が目につく。その一方で、相対的にホテルの割合が大きくなり、リゾートホテルなど宿泊施設の高級化が一段と進んだ。平成21年（2009）現在、ホテル5軒、旅館・民宿・ペンション17軒、ビジネスホテル1軒で、特に、プリシアリゾートの与論観光に果たす貢献度が大きくなっているようである<sup>6</sup>。

観光ブーム期に与論にやってきた観光客の大半は、東京ないしはその周辺地域の人びとで、東京方面からの人々は全観光客の75%近くにも及び、次いで、関西方面からの者が15%、その他が10%という割合であった〔戸谷1981〕。沖縄の復帰直後、観光客が減少してしまうのではないかと懸念されたが、昭和60年頃までは沖縄を経由して与論へ周遊する観光客が漸次増加傾向を示した。ただ、この時期から、観光客の多くが高級ホテルに宿泊するようになり、民宿客が少なくなってきたのが大きな変化であった。

過疎化の著しかった与論から人口の減少をくいとめたことは、観光開発の成果だと評価された〔戸谷1981〕。とりわけ、多くの農家が、きびの刈取りと重ならない季節に民宿を兼業として経営したり、土産物を販売したり、観光サービス機関へ農閑期に就労した。

## 観光と農業

昭和30年（1955）頃、与論島の全世帯の95.2%が農業を生業とし、全作付面積の4分の3ほどを自給用食糧作物にあて、残りの4分の1の耕地を換金作物であるサトウキビにあてていた〔戸谷1981〕。昭和30年代後半以降になると、大型の製糖工場が設立されたが、奄美振興政策のもとで、与論経済の建て直しが観光開発という形で促進された結果、農外収入を得る機会が増大した。昭和30年当時、全農家戸数の66%の農家が砂糖きびの生産を行っていたが、その作付面積は全耕地面積の20%程度に過ぎなかった。観光ブームがピークに達した昭和53年（1983）には、全農家戸数の91%の農家で砂糖きびが栽培され、その作付面積も全農作物作付面積の82%に達したが、これは必ずしも農業収入の増大を意味しなかった〔戸谷1981〕。昭和30年代前半期まで大きな比重を占めていた農業所得がその後次第に減少し、昭和42年（1967）にはじめて農外所得が農業所得を上回った。その後は急激に農外所得が増大し、昭和50年代半ばの時点では農外所得が全所得の4分の3を占めた。また、昭和41年（1966）の総所得に占める農林水産所得は52.8%、農外所得が47.2%であったのが、昭和53年（1983）にはそれぞれ18.8%と

2 与論町役場企画調整課編『平成11年町勢要覧』及び『平成21年町勢要覧』による。

3 同上。

4 同上。

5 与論町役場企画調整課編『平成15年町勢要覧』2003による。

6 『平成21年町勢要覧』（与論町）および「ヨロン島観光について」（ヨロン島観光協会）の資料による。

81.2%と、農外所得が大きく逆転した。農外所得のなかでも特に観光所得は、昭和45年(1970)に全体の2.2%であったのが、昭和53年には34.7%と激増している〔戸谷1981〕。

奄美全域で農家戸数が昭和30年代後半から50年代半ばまでの20年間に50%以上減少し過疎化が著しく進んだ中で、与論では20%程度の減少に止まり、与論の観光開発が過疎化をくい止めた〔戸谷1981〕。昭和30年(1955)当時、全農家戸数の88%にも及んでいた専業農家が、昭和50年(1975)には15%、60年(1985)には7%にまで激減したが、平成2年(1990)には18%、12年(2000)には28%と上昇に転じている。兼業農家について見れば、ブーム初期の昭和45年(1970)に83%で、ピーク期の55年(1980)には88%、昭和60年(1985)には93%とピークに達したが、平成12年には61%にまで減少し、逆に、専業農家の割合が増大しているのが特徴である〔戸谷1981〕。ブーム期の観光事業のほとんどは民宿を主体にしたものであり、夏場の農閑期を観光関係の仕事に、観光のない冬の時期を農業労働にふりむけるというように、農業と観光とは共存関係にあったが、ブーム後はこの補完関係が弱まり、農業を専業とするものが増えた。

与論町は過去一貫して砂糖キビを重視してきたが、ブーム期は特にかぼちゃが重要な作物であった。昭和52年(1977)当時、その売上高は1億7,700万円で、カボチャの生産額は、農林水産所得のうち第2位を占めた。その後、カボチャの生産が急落し、石川さといもやインゲン、切花などへと大きく転換した。また昭和50年代以降、畜産業の重要性と収益が右肩上がりに増加し、平成12年(2000)には7億7,200万円と、基幹産業であるサトウキビの生産高(6億9,800万円)を追い越した<sup>7</sup>。

	昭和52年(1977)	平成12年(2000)
砂糖キビ粗収入	7億3,000万円	6億9,800万円
紬の粗収入	9億2,000万円	-
畜産の粗収入	1億3,000万円	7億7,000万円
カボチャ	1億8,000万円	-

与論町の所得構成は、昭和53年(1978)の町民所得のうち観光所得が20億5,600万円、商業所得4億7,000万円、両者合わせて与論町における直接の観光収入は25億2,600万円となり、与論町総所得の34.6%に及んだ。同年の農林水産所得は13億8,000万円、そのうち砂糖キビの粗収入が8億7,500万円であった〔戸谷1981〕。与論町の経済にとって観光による収入がいかに大きなものであったかがわかる。

## 観光再生への取り組み

### 行政の取り組み

昭和50年代のブーム期の唯一の観光資源はビーチであった。昭和60年代から現在にかけて、与論島では観光ブーム初期の数字にまで落ち込んだ観光客数の回復をはかるため様々なイベントを企画して多様な年代層を取り込む努力を行ってきた。特に冬場の観光客の確保のために11月にヨロンパナウル健康ウォーク(1990)<sup>8</sup>、豊年祭、ギリシャ・フェスティバル(1997)、12月にヨロン・沖縄音楽交流祭(1995)、与論島ファン感謝祭、1月に南3島少年団バレー大会、3月にヨロンマラソン(1992)、パークゴルフ大会などを企画実施してきた。また冬期以外にも、4月に与論十五夜踊り、5月にパナウル王国杯争奪グランドゴルフ大会(1999)、6月にパナウル王国杯争奪ゲートボール大

7 与論町役場企画調整課編『平成13年町勢要覧』2001。

8 括弧内の数字は当該イベントの開始年を表す。

会（1985）、7月に森瑤子七夕ツアー（1996）、8月にサンゴ祭り、9月にラフウォータースイム（1993）、与論十五夜踊り、ビーチバレーフェスティバルなど、ほぼ一年を通して、各月に、多種多様な企画をたててきた。そして、近年特に積極的な受入れを行ない力を入れているのが修学旅行である<sup>9</sup>。こうしたイベントの多くは1990年代に開始されたが、今日まで継続されてきていることから、行政による観光の多角化や差別化、通年化は一定の成果をあげていると言えよう。

このことは、月別の観光客数にも見てとれる。例えば、昭和49年（1974）から平成20年（2008）までの入込客数をみてみると（表1参照）、1974（昭和49）年には最も多い月が8月でその年の入込客数全体の27.9%、最も少ない月が1月の1.9%であり、26%の差があった。また、観光ブームピーク時の1979（昭和54）年には、最も多い月が26.5%、最も少ない月が2.2%でその差が24.3%であった。さらに、1981（昭和56）年の統計で見れば、8月は全体の32%を占め、最も少ない12月は2.1%と、その差に30%近くの開きがあった。

一方、2008年には、最も多い月が8月の15.4%で、最も少ない月は1月の5.5%と、その差が9.9%と大幅に縮小している。つまり、観光ブームピーク時には最も多い8月だけで46,000人近くの人が与論島を訪れている。また1981年には7月と8月の2カ月で78,000人近くの人が訪れ、これは全体の54.5%にあたる。1990年代以降は、最も多い月と最も少ない月の差が小さくなり、2008年には最も多い8月でさえ1万人を下回ったが、少ない月でも3,000人台を維持し、一年を通して訪問客数の差が小さくなった。この背景には、秋から春にかけての冬場にスポーツを主とする様々なイベントの企画実施が挙げられる。

観光浮揚に向けた行政の取り組みは「与論まちづくり委員会」の活動にも見てとれる。現在同委員会のもとには次の6分野があり、それぞれに活動を展開している。すなわち、「IT推進グループ」、「まちづくり塾自然環境学部」、「方言・文化伝承グループ」、「特産品開発グループ」、「心の健康推進グループ」、「環境保全・再生グループ」である〔長嶋2005〕。これらのグループの他にも、ヨロン島観光協会に登録されている活動団体として、「おかみさん会」や「自然のめぐみ会」「ギリシャ村通り会」「銀座通り会」「与論町グリーンツーリズム推進協議会」などがあり<sup>10</sup>、また「緑を再生する会」「島文化の勉強会」など未登録の活動団体も多い。

さらに、与論町商工会や観光協会などが独自に与論島の観光の現状分析と観光浮揚に向けた方策を打ち出している。与論町商工会青年部は、農業、漁業、公共投資、企業誘致、U/Iターンのそれぞれについて与論経済の活性化へ可能性を検証した結果、島内経済波及効果の高い「観光業」の再生こそ与論経済の再生・活性化の要だと指摘する<sup>11</sup>。また、同青年部によれば、与論観光の再生のために必要なこととして、1）施設の再整備（部屋の改装、長期滞在型などの新しいニーズへの対応）、2）サービス機能・利便性の向上（交通機関、島内の観光案内機能強化）、3）情報発信力・マーケティング力の強化（インターネットの活用、顧客情報の収集と活用）を挙げ、そのために、情報通信技術（ICT）を使って観光客を増やすことを提案する<sup>12</sup>。

9 平成20年度でみれば、修学旅行の受け入れは6月に2校、7月3校、9月1校、10月3校、11月4校、2月1校の計14校、2,060名で、大半は東京と神奈川の高校である〔ヨロン島観光協会平成21年度通常総会資料〕。

10 ヨロン島観光協会「通常総会資料」（プリント資料）2009による。

11 与論町役場商工観光課「与論経済再生とICTの活用」（プリント資料）2009。

12 同上。

また、ヨロン島観光協会も、与論島の観光について独自に検証し、「ヨロン観光リバイバル計画」と称する以下のような分析および提言を行なっている。それによれば、観光ブーム後は、来島客数も15～16万人から6～7万人に減少し、現状は、「南の島ではあるけどどこにあるかわからない」、「美しいサンゴ礁は死滅し復活していない」、「ありふれたレジャーメニュー」、「老朽化した施設」、「人当たりのいい素朴な島民と一部のリピーター」と分析する。こうした現状分析を踏まえた上で、与論島の観光の再生に向けた取り組みの一番の問題点は、これまで幾度となく提案されてきた様々な「計画」を「実行」に移せない組織形態と観光従事者の意識低下にあると指摘し、その要因として、1) 役割と責任の所在が曖昧、2) 観光に関わる組織間の情報交換の欠如、3) 「企画調整課」「商工観光課」「観光協会」の3者間のシナジー効果の欠如、などを挙げる。以上から、ヨロン観光再生案として、「自然の再生」(パナとウルの再生<sup>13</sup>)と「ヨロンの価値づくり」(もてなしの心の向上)、「将来の観光に向けて」(プロジェクト制の実施)の3つの取り組みを提案する。「ヨロンの価値づくり」では、リピーター客の向上をめざし、おかみさん会による「ヨロンの名物料理」の開発、定期的な与論ニュースの発信、観光人材育成、方言を活用した観光施策などを指摘する。また、「将来の観光に向けて」では、イベントプロジェクトを見直し、個々のプロジェクトの自立化・事業化にむけて、運営体制や収益化のための施策の必要性を指摘する<sup>14</sup>。

### 民間の取り組み

与論島では行政が観光化や町づくりに民間人の活力を積極的に活用する姿勢がみられる。田島[2005]は、特に、与論の町づくりに来住者が大きく貢献していることを指摘する。こうした来住者の中には、「もずくそば」の開発者や貝細工芸家、与論健康村の創設者、与論ギリシャ村の代表者などがある。

モズクそばの開発者は、1988年「もずくそば」を開発し、1997年にはレストラン「青い珊瑚礁」を開業し、製塩等の製造も行うなど、主として特産品開発の面で与論町のまちづくりに貢献しており、まちが組織する「特産品開発グループ」のメンバーの1人でもある。

貝細工芸家は、大きな貝の装飾品などを加工販売し、島内外の土産物店等への販売も行っているほか、町が組織する情報グループ「E-OK」(イーマルケイ)のメンバーの1人であり、2003年にはインターネット上で「与論情報サイト」を立ち上げ与論の情報化を目指すなど、この面でも与論町のまちづくりに貢献している。

医師でもある健康村の創設者は、1995年に与論健康村を発足後、2002年にタラソセラピー(海洋療法)研究会を組織し、同年7月に第1回研究会を開催し、「『健康作り』『環境作り』『地域交流』」の活動を通じて、健康で自然と人が共存する豊かな社会作りを推進している。

与論島ギリシャ村の代表者は現在、ギリシャ村推進実行委員会会長で、ギリシャ村づくりの中心人物である。「ギリシャ」村とは、茶花の市街地の一部で白い建物が立ち並ぶ一角を中心とする地区の14軒から構成されている「村」のことで、「魅力のある、歩いて楽しい街並み」作りを目指して結成された。現在、「ギリシャ村通り会」には70事業所が加盟し、シンポジウムやギリシャフェスティバル等を開催しており、ギリシャと

13 花(パナ)とサンゴ(ウル)の再生を意味する。

14 具体的には、与論再生プランとして「ウルプロジェクト」「美ら島プロジェクト」「レポート向上・快適滞在プロジェクト」「イベントプロジェクト」「サザンクロス事業化プロジェクト」「自立化プロジェクト」の6つのプロジェクトの実施を提案する。

の交流やまちづくりの方向に関する議論を進めてきている。2001年3月の第4次与論町総合振興計画（「人と自然が輝くオンリーワンの島づくり」）の戦略プロジェクトの一つ「生きた博物館構築プラン」には、「ヨロン・ギリシャ交流のまちづくりの推進」の項目が設定され、「ギリシャ風建築物の建設促進」や「ギリシャ関連施設の充実」が謳われている。

以上のように、与論島のまちづくりにはIターン者の活躍が目立つ理由として、田島は、観光ブーム期に膨大な「都会人」を受け入れた経験や学生あるいは出稼ぎ者としての島外生活経験などから、本土の人に対する違和感がなく、来住者の積極性や独創性、先覚性を認めて評価し、行政の中に取り込んで活躍の場を与えていることなどを強調する。

### 考察

以上見てきたような与論島の観光化の歴史的経験、とりわけ観光収入の減少、宿泊施設の廃業、若者の島外流出など観光ブームの衰退の経験は与論島民にどう影響したのだろうか。

それは、第一に、町民の間に危機感が芽生え、与論島の将来に対する自覚と責任と行動が生まれたことが挙げられる。ブームが後退して、観光客の誘客のために始めた活動が、与論島民を活性化させ、島に対するアイデンティティ意識の強化や環境意識をもたらしているといえる。

その結果、第二に、様々なイベントや方策が考案され実行されるようになった。上述したように、1980年代後半から現在にかけて、観光ブーム後の落ち込んだ観光客数の回復をはかるため、与論島民は様々なイベントを企画したりして、観光再生に取り組んできた。その特徴は、1) 受動的観光から能動的観光へ、2) 量から質の観光へ、3) 自然依存型から自然利用型観光へ、4) 娯楽型から健康・癒しの観光へ、5) 農業と観光の分離から連携へ、6) 個人から島民全体の観光へ、7) 夏型から通年型観光へという傾向を示している[桑原2005]。奄美群島全体での観光化の特徴として、スポーツアイランドとアイランドセラピーがあるが、与論島もこうした方向で新たな観光化を推進してきた。スポーツアイランド化ですでに定着しているのが、ヨロンマラソン<sup>15</sup>やグランドゴルフ大会などのイベントである。娯楽型から健康・癒しの観光としては、健康ウォークやタラソセラピー、アイランドセラピーなどが挙げられる。また、修学旅行の受入れも年々定着してきて、関東の高校を中心に毎年14～18校が来島するようになった。こうして、現在、観光客の数はブーム期の半分以下の6万人台に落ち込んでしまったが、ブーム後の様々な努力が一定の実を結び、一年を通して、様々な年代層の観光客が来島するようになった。

第三に、行政と民間が連携し、組織再編や新たな組織化がなされ、島民の間に強い連帯意識が形成されてきたことが指摘される。ブーム後の大きな変化の一つは、観光活性化や町づくりのための様々な団体や組織、運動が生まれ、官民一体となって活発に活動を展開していることや、与論島に数多く在住するIターン者が観光の多角化に様々な形で貢献していることである。島民と来住者、それに様々な団体と運動との間でのどのような連携のかたちが可能かという模索は、現在なお続けられている。

---

15 ヨロンマラソンは1992年に始まり、2010年に19回を数え、毎年1000人以上の参加者があり、リピーターが多いとも言われている。

## 結び

与論島の島民は、人口6千の小さな島でありながら、かつて空前の観光ブームを経験したことにより、良きにつけ悪きにつけ、常に過去のブーム期を一つの参照枠として意識しつつ活発に活動してきたといえる。その意味でも、島民にとって、観光ブーム期の経験のもつ意味は、島民が自覚している以上に、実は、極めて大きく、かつ重いものだと言える。また、全国的な市町村合併の流れの中で、与論町は住民投票の結果を踏まえて沖永良部島の2町との合併を選択しないという決定を下し〔南2004, 平井2005〕、観光の再生をまちづくりと連携させて推進してきた。今後の与論島の観光再生の一つの鍵は、地方あるいは離島が財政的におかれた困難な状況という行政サイドの危機意識を住民がどこまで共有し世代間で継承していけるのかということにあるように思われる。

## 謝辞

2009年3月の与論島での調査に際して、与論町商工観光課係長の大馬福德氏、ヨロン観光協会会長の田畑克夫氏から多くの情報や資料を提供していただいた。記して感謝の意を表します。

## 参考文献

- 赤田光男1993「与論島の洞穴墓と改葬習俗」(共同研究「葬墓制と他界観」),『国立歴史民俗博物館研究報告』49, pp.323-347
- 牛島巖1973「鹿児島県大島郡与論町調査報告」『南山大学文化人類学研究会会報』7巻
- 牛島巖1972「与論島調査予備報告-パラジ, イハイ祭祀, シヌグ」『社』5(1), 東京都立大学社会人類学研究室
- 牛島巖1983「与論島社会の<イハイ>祭祀と家族-朝戸部落の事例を中心に」『現代のエスプリ』194 奄美の神と村』至文堂, pp.75-100
- 大内森業1982『ゆんぬ=与論-島のくらしと民俗』北風書房(星雲社)
- 大山彦七1960『南西諸島の家族制度の研究』関東書院
- 大山彦七1960「パラジとシニグ」『鹿児島大学社会科学報告』6
- 大山彦七1960「パラジとシニグ補遺」『鹿児島大学社会科学報告』7
- 鹿児島地域経済研究所2003「情報化によるオンリーワンの島づくり-島の自立化に向けた与論町の取組み」,『KER地域経済情報』164, pp.14-16
- 加藤正春1977「葬制と祖霊の形成--与論島の事例」,『南島史学』10, pp.45-59
- 加藤正春1981「双系社会の親族体系--与論島における親族再編成の構造(奄美<特集>)」『南島史学』17・18, pp.110-143
- 金城 善 2007「与論島の墓制を訪ねて」,『沖縄民俗研究』25, pp.67-74
- 菊千代1985『与論のしまがたり』はる書房
- 桑原季雄2005「与論島における観光化と地域振興」『南太平洋海域調査研究報告』(Occasional Papers) No.42, pp.90-96
- 小園公雄1988「奄美諸島・与論島近世社会の一考察--基家文書の紹介(系図と史料)」,『鹿大史学』36, pp.1-41
- 近藤功行2001「与論島における死をめぐる人類学的考察-「適寿」という用語について」(<国際シンポジウムポスターセッション>生・老・死:日本人の人生観-内からの眼,外からの眼)(死)
- 近藤功行2003「与論町における死亡場所,生死観と終末行動をめぐる人類生態学的研究」,『志学館法学』4, pp.181-201

- 近藤功行2004「与論島における洗骨習俗の現状」,『志學館法学』5, pp.213-241
- 水流郁郎1960「与論島の通過儀礼」,『民間伝承』24(6)
- 栄喜久元1964『与論島の民俗』奄美社
- 栄喜久元1971『与論島の民俗語彙と昔話』奄美社
- 田島康弘2005「与論島における来住者とまちづくりーとくにギリシャ村を中心にー」『南太平洋海域調査研究報告』(*Occasional Papers* No.42, pp.78-89)
- 津波高志2007「与論島デジカメ民俗散歩」,『沖縄民俗研究』25, pp.51-65
- 津波高志, 稲村務2005「民俗調査データベースの構築ー奄美諸島における墓地とエスノ・ボタニーの調査からー」,『人間科学』(Human Science) 15, pp.115-127
- 戸谷修1981「与論農村の構造と変化-朝戸部落を中心に-」松原治郎他編『奄美農村の構造と変動』御茶の水書房
- 長嶋俊介2005「亜熱帯・温帯境界域としての島おこし課題ー与論における地域特性の再発見と地域振興ー」『南太平洋海域調査研究報告』(*Occasional Papers* No.42, pp.102-110)
- 西野誉彬2006「団塊の世代が青春時代を謳歌(おうか)したヨロン島は今」(特集 海の恵みと観光),『月刊観光』477, pp.34-36
- 藤沢正美1971「ルポ・崩壊-5- “観光の波”に難破した“誠”ー与論島(鹿児島県)」,『朝日ジャーナル』13(35), pp.42-46
- 平井一臣2005「与論における市町村合併」,『南太平洋海域調査研究報告』(*Occasional Papers* 42, pp.74-77)
- 南 政吾2004「町の単独存続と将来を見据えた振興策」,『奄美ニューズレター』7, pp.16-18

## 参考資料

- 与論町役場企画調整課編『平成11年町勢要覧』1999
- 与論町役場企画調整課編『平成13年町勢要覧』2001
- 与論町役場企画調整課編『平成14年町勢要覧』2002
- 与論町役場企画調整課編『平成15年町勢要覧』2003
- 与論町役場総務企画課『平成20年町勢要覧』2008
- 与論町役場総務企画課『平成21年町勢要覧』2009
- 与論町役場商工観光課「みじらしゃイベント IN YORON」(プリント資料) 2003
- 与論町役場商工観光課「年別入込客数表」(プリント資料)
- 与論町役場商工観光課「旅行客入込調査表」(プリント資料)
- 与論町役場商工観光課「ヨロンマラソン・データ」(プリント資料)
- 与論町役場商工観光課「与論経済再生とICTの活用」(プリント資料) 2009
- ヨロン島観光協会「ヨロン島観光について」(プリント資料) 2009
- ヨロン島観光協会「通常総会資料」(プリント資料) 2009

表1：与論島年別入込客数

	1月		2月		3月		7月		8月	
1974	1,392	1.9%	1,629	2.3%	6,255	8.9%	14,230	20.3%	19,583	
1976	2,409	24.0%	2,023	2.0%	5,626	5.6%	18,976	18.9%	31,620	
1979	3,381	2.2%	3,835	2.5%	10,886	7.2%	32,493	21.6%	39,948	
1981	3,664	2.5%	4,111	2.8%	8,938	6.2%	32,094	22.5%	45,593	
1986	2,635	2.8%	3,147	3.3%	6,622	7.0%	22,145	23.6%	23,333	
1992	3,466	4.0%	4,646	5.3%	6,992	8.1%	13,928	16.1%	16,785	
1994	3,973	4.9%	4,998	6.2%	7,069	8.8%	10,294	12.8%	15,521	
2001	3,580	5.2%	3,536	5.1%	6,112	8.9%	7,797	11.3%	11,069	
2008	3,364	5.5%	3,692	6.0%	5,478	9.0%	6,594	10.8%	9,374	
	9月		10月		11月		12月		計	
27.9%	3,152	4.5%	2,712	3.8%	2,690	3.8%	3,620	5.1%	69,986	
31.5%	5,845	5.8%	5,247	5.2%	4,374	4.3%	3,923	3.9%	100,347	
26.5%	7,509	4.9%	6,388	4.2%	7,657	5.0%	4,313	2.8%	150,387	
32.0%	7,071	4.9%	4,996	3.5%	5,386	3.7%	3,088	2.1%	142,465	
24.8%	6,586	7.0%	4,077	4.3%	3,968	4.2%	3,695	3.9%	93,747	
19.4%	8,311	9.6%	4,437	5.1%	5,688	6.6%	3,413	3.9%	86,289	
19.4%	8,547	10.7%	3,647	4.5%	4,245	5.3%	4,289	5.3%	79,883	
16.1%	6,398	9.3%	4,121	6.0%	4,613	6.7%	4,710	6.8%	68,413	
15.4%	5,200	8.5%	4,819	7.9%	4,725	7.7%	4,038	6.6%	60,661	

出典：ヨロン島観光協会「ヨロン島観光について」（2009）より作成。